

ダンサー不在のバレエ「花火」における光と音の
コラボレーション
池原舞
早稲田大学

セルゲイ・ディアギレフ (Sergei Diaghilev, 1872-1929) の率いるバレエ・リュスによって、1917年4月のローマ・シーズンにコンスタンツィ劇場で初演されたバレエ「花火」(Feu d'artifice) は、モダニズム芸術の先駆事例の一つとして認識されてきた。この作品は、舞台上でダンサーたちが踊るものではなく、未来派のジャコモ・バッラ (Giacomo Balla, 1871-1958) によってデザインされた舞台装置に「光」が当てられ、それらがあたかも踊っているかのように点滅するという斬新な設計に基づいたものである。

しかしこれまで、バレエ史においても美術史においても、この作品の発想自体の奇抜さについては言及されてきたものの、舞台の内容の具体性にはほとんど触れられず、またその背景にある制作者たちの思想についても十分に議論されてこなかった。

そこで本発表では、第一に、収集可能な限りの先行研究から、この作品の実態を明らかにすることを試みる。ここで探るのは、単なる初演の騒動の詳細ではなく、実際には実現・成功しなかった部分をも含む制作者たちのプランである。主に参照するのは、アレッサンドロ・ニグロによる批評研究 (2013)、グッゲンハイム美術館主催による「イタリア未来派 1909-1944: 世界の再構築」展 (2014) にて紹介された一連の二次研究である。

第二に、音楽がこの作品に寄与したものを考察する。《花火》の音楽は、ストラヴィンスキー (Igor Stravinsky, 1882-1971) によって 1908年に作曲されたものであり、この舞台のために委嘱された作品ではない。だが、その巧みな管弦楽法による音響帯は極めて空間的であり、光と音のコラボレーションにふさわしい立体性を備えている。

これらを踏まえて第三に、「花火」の舞台は、造形芸術においてどのように新しかったのかを明らかにし、未来派の活動の変遷およびこのあとに隆盛することになる機械美学の観点を交えて、この作品を文化史のなかに改めて位置付ける。

参考文献

Adamson, Walter, Emily Braun, Silvia Barisione, Emilio Gentile. *Italian Futurism, 1909-1944: Reconstructing the Universe, Guggenheim Museum, New York: Exhibition Catalogues*. Edited by Vivien Greene. New York: Guggenheim Museum Publications, 2014.

Nigro, Alessandro. "Roma, aprile 1917: le due serate di Giacomo Balla al Costanzi. Qualche precisazione sulla scenografia plastica per 'Feu d'artifice'", *Contemporanea. Scritti di storia dell'arte per Jolanda Nigro Covre*. Edited by Ilaria Schiaffini and Claudio Zambianchi. Roma: Campisano, 2013, 167-173.

Rainey, Lawrence, Christine Poggi and Laura Wittman eds. *Futurism, An Anthology*. New Haven and London: Yale University Press. 2009.

Stravinsky, Igor. *Fireworks Feu D'artifice, Irchestral Fantasia. Op.4. Study Score*. London: Eulenburg. 1986.